



「生徒たちにとってたいへん面白い本」
—エリザベス・R・プールボー使用の教科書について
(1886年～1892年)—

宮城学院女子大学 一般教育部准教授 栗原 健

はじめに

宮城女学校（現宮城学院）の初代校長として着任したエリザベス・R・プールボー（1854年—1927年、1886年着任～1893年離任）や彼女の同僚の教師たちは、どのように授業を行っていたのであろうか。授業の種類やその印象については、学則やプールボー自身の報告、元生徒の証言等から知られているが、詳しい授業内容やその形態については記録が乏しいため定かではない。しかしながら、プールボーの書簡には、彼女が使用した教科書・参考にした図書に関する言及がしばしば登場する。こうした書籍を通じて、当時の生徒たちが学んでいた事柄を詳しく知ることができるのではないだろうか。

本論の目的は、プールボー書簡に登場する3点の教科書を取り上げてその内容を概観することにより、女学校草創期における授業風景を再構築する手がかりとすることである。興味深いことに、プールボーが用いた教科書のうち1点は1892年、ジャイラス・P・モール宣教師（1847年—1935年）の妻アニー（アンナ）・M・モール（1853年—1910年）によって短縮版が編まれ、日本語に訳されている¹。プールボーが米国に戻ることを思案していたこの重要な時期に、なぜ教科書の邦訳が仙台でなされたのであろうか。こうした背景についても本論では探っていくたい。

なお、文中に登場するプールボー書簡の頁番号は、全て『E・R・プールボー書簡集』（宮城学院、2007年）によるものである。

1 英語の教科書：*Appleton's School Readers*

プールボー書簡に登場する書籍に関する最初の言及は、仙台到着から13日後にあたる1886年7月29日に書かれた、改革派教会外国伝道局財務幹事ルドルフ・ケルカー宛の手紙に登場する。「仙台に来て初めての宣教師団会議が、私の家の居間で開かれました。会議の間、キティー（筆者註：プールボーの姪サラ・キャサリン・プールボー）は食堂にいるように言われておりました。会の終了後、その部屋から熱心な声が聞こえてきましたので行ってみますと、キティーが10歳と12歳の日本人の子供2人に、*English Penmanship* を使いながら英語を教えておりました」（16頁）という一文である。この

¹ モール（Moore）の名は、「ムーア」のほうが実際の音に近いであろうが、宮城学院関連の書籍においてはおおむね「モール」と表記されている。そのため、ここでも「モール」と表記しておく。

English Penmanship がどのような書物であるかは不明であるが、タイトルから見て英習字の本であろう。ただし、キティーはこの時点ではまだ6歳であり、この本は彼女自身の学習用に与えられていたものである可能性もあるため、これを直ちに女学校の教科書と見ることは難しい。

正式に教科書に関する情報が登場するのはその約1ヶ月後、10月26日に書かれたケルカー宛の書簡である。

「お送りくださった本が今朝届いたことをお知らせでき、たいへん嬉しく存じます。早速使わせていただいております、生徒たちもたいへん喜んでおります。日本人の通常の考え方とは異なるものを教えるには、絵画はほんとうになくてはならないものです。アップルトン・リーダーズの中に描かれている絵を見ますと、それが宗教的なものではなくても、アメリカの子供たちの生活の様子が、自分たちよりもはるかに優れたものであることが分かります。」(29頁)

末尾の文章の優越意識が気になるが、この文章からプールボーが開校直後から、挿絵が豊富に掲載されている『アップルトン・リーダーズ (*Appleton's School Readers*、以下 *Readers*)』を日本人生徒にアピールしやすい有望な教材として見ていたことが分かる。実際、この *Readers* は、その後の宮城女学校における英語教育の基礎的な教科書となっていく²。その重要性がよく表れているのが、開校2年後の1888年7月3日付で「メッセンジャー」紙宛てにプールボーが記した文章である。

この中で彼女は、女学校には入学を希望する少女たちが溢れていたが、それは、「彼女らの多くは、即座に、いわば1日で、英語を身につけたいと熱心に望んで」いたからである、ほどなく「英語の習得に『王道なし』と理解した多くの者は脱落していき、「最後には、真面目な少女たちだけが残ったのです」と若干のユーモアをこめて記している(104頁)。書簡の末尾でプールボーは、クリスマスにプレゼントを女学校まで送ってくれるよう読者に呼びかけているが、そこには、「プレゼントにぴったりの本もあります。少なくとも20名の生徒たちは、クリスマスまでにアップルトン・リーダーズ第3巻の全訳を難なくこなせるようになっていることでしょう。ですから、短い物語などは十分に楽しむことができます」との文が見られる(106頁)。

ここからプールボーらが、*Readers* 収録の話を日本語に翻訳させるという授業を行って

² 1891年7月21日の書簡には「リード&ケロイ著の『上級英語』(Reed & Kellogg's "Higher Lessons in English")を12冊お送り願います。」(213頁)と記されているため、プールボー在職期の後期には、この教科書も英語教育のために用いられたことが分かる。なお、Alonzo Reed and Brainerd Kellogg. *Higher Lessons in English* (New York: Maynard Merrill, 1898) は Google Books USA で読むことが可能である。

いたことが分かる。ということは、*Readers* 第3巻を見れば、当時の生徒たちの英語レベルがどの程度のものであったかがうかがえることになる。

幸いなことに、1881年版の同書第3巻が Google Books USA 上において公開されているため、誰でも読むことができる³。1881年版の *Readers* 冒頭に登場するのは、「*Bob Brown's Dog*」という話であり、このような文章で始まる。

Little Bob Brown had a fine large dog, named Rover. Bob and Rover were great friends, and used to play together nearly all day long.

When Bob's sixth birthday came, he had to go to school. Bob was glad to go, but he was very sorry to leave Rover at home. When the time to start came, he put his arms around the dog's shaggy neck and whispered something in his ear.

ボブが学校へ行った後ローヴァーはこっそり学校に忍び入り、ボブがいる教室を見つけ出して入り込むと、ボブを引っ張り出そうとする。先生も子供たちも大笑いとなり、ボブを犬と一緒に帰宅してよいこととなった、という物語であり、犬を迎える少年の挿絵が添えられている。このテキストの後に物語の短い要約が置かれているが、ところどころに空欄があり、生徒は、空欄を英語で埋めながらこの要約全文を書き写すよう指導されるのである（「*Rover was a _____. He followed _____ to school. In the hall he found Bob's _____ and _____.*」以下略）⁴。

第5話まで行くと、宣教師が運営する女学校にふさわしい話が登場する。この「*By the Brook*」という話は、小川のほとりに遊びに行った少年と少女が、そこで見たものを母親に報告する話である。純真な少女は「鳥たちが神様に感謝しているのを見た」と主張する。鳥は水を啜るたびに天を仰ぐ。「鳥は水のことを感謝しているんだと思うわ。そうでしょう、お母さん？」これに対して母親は、「鳥は口に水を入れて喉に流し込まなくてはならないので、そのようなポーズをしているだけなのよ」と説明しつつも、「でも、鳥たちが神様に感謝しているというのはとても良い思いつきね。そういうふうに考えるなんて、お母さんは嬉しいわ（*But that was a very pretty conceit of yours about their giving thanks to God, and I am glad you thought of it*）」と話す⁵。この文章を説明しながらプールボーは、神に感謝することの意味を生徒たちに教えたのかも知れない。

³ William T. Harris, Andrew J. Rickoff, and Mark Bailey, *Appleton's School Readers: The Third Reader* (New York: D. Appleton, 1881)。なお、宮城学院資料室に保存されている *The Third Reader* は、1902年以後に American Book Company から刊行されたものであり、プールボーの在職期間中に使用されていたものではない。内容は同じであるが、最終部分に30頁あまり旧版には無い物語や詩が追加されている。

⁴ *The Third Reader* (1881), 3-5.

⁵ *Ibid.*, 15-16.

これらが教科書の冒頭部分にある物語であることを考えると、巻末にたどり着いた時には生徒たちの英語力は相当なものになっていた筈である。まして、彼女たちはテキスト中の全ての話を翻訳できるまでに成長できるとプールボーは見込んでいる。これが彼女の誇張でなければ、生徒たちは在学中に英文の書物をかかなりの程度、読みこなせるようになっていたことであろう⁶。なお、第3巻を学び終えた者についてはさらに高度の *Readers* 第4巻に進んだこと、生徒たちは教科書を借用するのではなく購入していたことが、1889年6月13日付のケルカー宛てのプールボー書簡からうかがえる。

「次年度に必要な書籍が若干（それほど多くはありません）ございます。内訳は、アップルトン・リーダーズ第3巻を1ダースと、『讚美歌と聖書』（ネヴィン社）を3ないし4ダース、教師手帳を6冊、『ビール式柔軟体操と健康体操』を1冊、リーダーズ第4巻を12冊です。ニューヨーク市バックマン街29 & 31のエクセルシオール出版社の『子供たち』もお願いいたします。これらは全部、生徒たちに購入させますので、その請求書もお送りください⁷。」(141頁)

2 聖書の教科書 (1) : ワイザー著 *A Child's Life of Christ*

プールボーは、どのように聖書の内容を生徒たちに教えたのだろうか。この点に関する情報が登場するのが1887年2月8日付のケルカー宛の書簡であり、ここで彼女は聖書の授業で用いる教科書について言及している。

「聖書の学びは私たちにはたいへん必要ですので、聖書辞典は重宝することでしょう。もう1冊の *Abbott & Giltman's Harmony of the Gospels* は、自分のためにお願いしました。その本をお見かけの際は、買っていただければ幸いです。他の2冊の本 *Story of the Gospels* とワイザー博士の *Life of Christ* は、博士自らのご親切にも送って下さいました。生徒たちにとってたいへん面白い本だということが分かりました。その英文は生徒たちが容易に習得でき、内容もごく新しいもので、熱心に取り組めるようです。 *Life of Christ* を来年度の教科書として使うつもりです。」(42頁)

⁶ プールボーは、初級の英語クラスを *Readers* 第3巻をもって始めたのだろうか。この内容は、初めて英語に触れる日本人には難し過ぎるように見える。1887年1月19日付のプールボーの書簡には「初等リーダーのクラス (my class in the First Reader)」(38頁) という言葉が登場する。これは、第3巻よりもやさしい *Readers* を用いていたということの意味するのであろうか。しかしながら、書簡の中で教科書として注文されているのは第3巻と第4巻のみである。推測であるが、「First Reader」のクラスでは *Readers* ではない平易な読み物が用いられていたのであろう。

⁷ *The Fourth Reader* (New York: D. Appleton, 1885) も Google Books USA において公開されており、その内容を見ることが出来る。

言及されている書籍のうち、*Abbott & Giltman's Harmony of the Gospels* と *Story of the Gospels* については詳細は不明であるが、重要なのは「ワイザー博士の *Life of Christ*」である。プールボーが、生徒たちの反応を考慮した上でワイザーの著作を教科書として採用していたことが、この文章から明確に読み取れるからである。

ここで言われている「ワイザー博士」とは、ペンシルヴァニア州スピナーズタウンの Trinity Great Swamp Church 牧師であったクレメント・ツヴィングリ・ワイザー (Clement Zwingli Weiser, 1830 年－1898 年) のことである。彼はドイツ改革派教会外国伝道局の理事長でもあった人物であり、プールボーの日本宣教にも大きな関心を抱いていた筈である⁸。その彼が宣教活動の一助にとプールボーに送付したのが、児童向けにイエスの生涯を説き明かした自著 *A Child's Life of Christ* (1886 年) であった。

この著作の序文の中でワイザーは、多くの米国の児童たちは、イエス・キリストが人類を救うためにこの世界に来たこと、ベツレヘムで誕生して十字架にかかったことは知っているものの、それ以外については実際にはほとんど理解していないと嘆いている。キリストについて彼らが知っていることは「大きな石ころの山 (*a large heap of stones*)」のようであり、その全容がいかなる順序でつながっているかを理解していないというのである。ワイザーはこの状態を、深海の底に広く散らばっている真珠に比較し、福音書に記されているキリストの行いや教えは、丹念に集めてつなぎ合わせ、冠のようにすべきものであるとする⁹。

そのため、この著作の中で彼は、福音書に記されているイエスの生涯の物語を可能な限り時系列的に並べ直し、各エピソードの背景を説明しながら、個々の物語からどのようなことを学ぶことができるか、児童でも理解できる平易な文章で解説していくのである (対象は「若い子供たち、8、10、12 歳の少年少女」と序文にある¹⁰)。ワイザーの文章は明晰でバランスが取れており、過度の感傷性に落ち込むこともなく、教育者・文筆家としての彼の有能さが見て取れる。また、16 点の美しい挿絵が加えられており、日本人の挿絵好きを見抜いていたプールボーがこの書籍を教科書として選択したのも、理解できるところである。

3 教科書の抄訳：モール夫人著『童蒙基督一代記』とその背景

プールボーたちは、ワイザーの著作を用いてどのように生徒たちに指導したのであろうか。挿絵を含めて 328 頁もある長大な著作である以上、この書物の内容を全て授業中に網羅したとは考えにくい。彼女たちはこの教科書のどの部分を強調し、いかなる説明を加え

⁸ ウィリアム・メンセンディック『ウィリアム・ホーイ伝－苦悩の生涯と東北学院の創立』(出村彰訳、東北学院、1986 年)、88 頁。

⁹ Clement Zwingli Weiser, *A Child's Life of Christ* (Reading: Daniel Miller, Philadelphia: 1886), 10-11.

¹⁰ *Ibid.*, III.

たのであろうか。

そのヒントとなる資料が存在する。実は、ワイザーのキリスト伝の抄訳がプールボーの日本滞在中に作成されているのである。これは『童蒙基督一代記』（以下、『一代記』）と題された一書であり、ワイザーの *A Child's Life of Christ* をアニー・モール夫人が大幅に短縮してまとめたものである。この英文原稿を三浦ケイ子なる女性が、当時仙台神学校本科で学んでいた須藤鬼一の助けを得て邦訳し、1892年（明治25年）夏に刊行したのであった¹¹。

ここで気になるのが、この翻訳がなされた背景である。『一代記』がどのようにして誕生するに至ったのか、確実なことは定かではないが、1つの推測は成り立つであろう。手がかりは、三浦ケイ子を書いた序文にある日付である。

序文の末尾において三浦は「明治二十五年七月」と日付を記入しており、その文面から、この序文を書いた時点では翻訳の原稿が完成していたことがうかがえる¹²。モール夫人がワイザーの著作を書き改め、その後直ちにこの翻訳がなされたのだとすれば、夫人が『一代記』の英文を書いたのは1891年（明治24年）後半から1892年（明治25年）冒頭のことと考えることができよう。特に、『一代記』には原著の挿絵のうち数点が転載されており、挿絵の原版はペンシルヴァニアから直接取り寄せられたものである¹³。この点を考えると、この出版プロジェクトには少なくとも数ヶ月から1年を要した筈である。

ここで重要になるのは、1891年から1892年という時期は、プールボーやその周辺の人々にとって非常に困難な時期であったことである。いわゆる「宮城女学校のストライキ」騒ぎによって5名の優秀な生徒が退学になったのは、92年1月21日である。しかしながら、学校の管理運営権を日本人の手に移譲して日本流のカリキュラムを組めという一部教員や幹事からの突き上げは、前年の91年夏頃から学校内に混乱をもたらしていた¹⁴。

プルボーは以前から日本語学習の難しさを嘆いていたが、この時期には「もし私が日本語をうまく使いこなせていたなら、日本人の特性にうまく対処できたはずだと思います。（略）6年に及ぶ厳しい、祈りのうちの学習にもかかわらず、私はまだ日本語が身に着いておりません」と述べ、「文字通り、耳も聞こえず口もきけない状態」だとまで言い

¹¹ アンナ・モール『童蒙基督一代記』（三浦ケイ子訳、1892年）。この書物は国会図書館のオンラインコレクションで公開されている。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824230>

¹² モール、「序」2頁目（頁番号無し）。

¹³ 挿絵に関するこの情報は、ペンシルヴァニア州ランカスターの福音・改革派歴史協会に所蔵されている『童蒙基督一代記』添付の情報カードに記されている。挿絵に関するカード中の文章は以下の通りである。“The pictures were printed at Reading, Penna, by Elder Daniel Miller, proprietor of the ‘Reformed Church Board’ and forwarded to Sendai by R. F. Kelker, for Mrs. Moore, and there the Japanese explanations were printed on them on the margins, and then bound up with the other portions of the work.”

¹⁴ この問題の詳細については以下を参照。宮城学院『天にみ栄えー宮城学院の百年ー』（宮城学院、1987年）、234-253頁。

切っている(1892年8月24日、252頁)。これがプールボーだけの問題ではなかったことは、「在日宣教師団の中に、実用的な日本語の心得のある女性が1人もいないことは、私たちにとって大きな損失となっております」(1891年8月18日付、214頁)との彼女の文章からもうかがえる¹⁵。こうした米国人教師陣の日本語能力の無さは、宮城女学校における教育を「洋風一天張」(相馬黒光)と批判する反対派の不満に拍車をかけるものであった筈である¹⁶。

この状況の中でプールボーが、聖書教育のために日本語の教材が必要であると痛感し、愛用の教科書の短縮版を邦訳することを考えたとしても、これは自然な流れであろう。しかし、校長の激務は彼女にその作業に取り組む時間を許さない。そのために、彼女はこの仕事をモール夫人に依頼したのではないだろうか。三浦ケイ子による翻訳が完成したのが92年の7月であるとする、これはまさにプールボーが米国に帰国することを正式に申し出た時期(7月1日)と重なっている。彼女にとっても、教科書の邦訳が完成間近であることは安堵の材料であったことであろう。

プールボーの書簡には『一代記』に関する情報は見当たらないため、上記のことは全て状況に基づく推測である。しかしながら、もう1つ手がかりとなる事柄がある。この本を翻訳した三浦ケイ子という女性であるが、彼女は何者なのであろうか。彼女が宮城女学校の関係者であった可能性はあるのだろうか。

三浦の名前は、女学校の教職員名簿・学生名簿には記されていない¹⁷。しかし、彼女については、東北学院史資料センター調査研究員の日野哲氏から重要な情報を得ることができた。三浦の名は、仙台東一番丁教会の転入会者名簿の中に登場するのである¹⁸。名簿の記載事項によると三浦は明治元年に東京・小石川に出生しており、明治24年に東一番丁教会に転入会している。名簿上では彼女の住所は「東三番町」とある。宮城女学校の住所が東三番丁であったことを考えると、この時点で三浦が女学校と何らかのつながりがあった可能性が強いであろう(ただし、『一代記』の発行者欄には「仙台市南町通十番地 三浦ケイ」とあるため、翌年には彼女は東三番丁には居住していなかったと考えられる)。もしも三浦が女学校の関係者であったとすれば、この翻訳作業にはプールボーの意向が反映されていたと推測することができる。

ここが興味深い点であるが、もしもこの邦訳がプールボーの意向によるものであったとすれば、『一代記』を読めば、プールボーや彼女の同僚たちがどのように生徒を教えたかを想像することが可能であろう。特に、ワイザーの原著と比較した上で、どの箇所が

¹⁵ プールボーはこのほか、1890年10月28日付(189頁)、1891年2月11日付(200頁)の手紙においても自己の日本語学習の遅さを嘆いている。

¹⁶ 相馬黒光「宮城女学校最初のストライキ」より。『天にみ栄え』、237頁。

¹⁷ この点について、宮城学院資料室の佐藤亜紀氏に確認して頂いた。

¹⁸ 日野哲氏は「三浦ケイ」が登場するページのコピーを送付して下さいました。感謝を申し上げます。また、日野氏からは、この翻訳の手伝いをした須藤鬼一の経歴に関する情報も頂いた。

削除されてどの箇所が残されたか、ワイザーのメッセージのどの点に強調が置かれているかを分析すれば、彼女たちが生徒に教えようとしたポイントを読み取ることができるのではないだろうか。

仮にこの本の作成がプールボーの希望でなされたものではなく、モール夫人が自身の判断のみで行ったものであったとしても、モール夫人はプールボーの帰米後に宮城女学校の副校長に就任した人物である。授業の際には、自らがまとめたこの書物を指導用に用いたことであろう。その点を考えると、この『一代記』は、当時の宮城女学校でどのように聖書教育がなされていたかを伝える貴重な史料であると言えよう。今後、同書の内容について詳しい分析がなされることが期待される。

4 聖書の教科書 (2) : ガンス著 *Gospel Lessons*

プールボーの書簡には、ワイザーのキリスト伝以外の書物も聖書の教科書として言及されている。1888年9月29日付の宛先不明の書簡の中で彼女は、「私の教えるあるクラスではゴース博士 (Dr. Gaus) の *Gospel Lessons* を使い授業をしています。オムラさんと日本人教師のうち1人が、遅れ気味の生徒を担当しています。」(122頁)と述べている。

この「ゴース博士の *Gospel Lessons*」については、当初は全く情報を見つけることができなかったが、ペンシルヴァニア州ランカスターのランカスター神学校図書館に問い合わせたところ、意外な事実が判明した。この書物は David Gans が著した *Gospel Lessons* (1869年) のことを指すと見られるのである¹⁹。「Gans」と「Gaus」の綴りは筆記体では見分けがつきにくく、容易に誤読し得る。このため、『E・R・プールボー書簡集』には誤った著者名が記載されてしまったのであろう。

著者デイヴィッド・ガンス (1822年－1903年) の生涯については情報が乏しく、1859年にはペンシルヴァニア州ハリスパークで牧師として奉仕していたこと、1869年に *Gospel Lessons*、翌70年に使徒書簡を扱った *Epistle Lessons* をフィラデルフィアで刊行したこと以外には、詳しいことは知られていない。しかしながら、*Gospel Lessons* の序文には、この著作が日曜学校における需要を満たすために書かれたむねが記されており、著者が長年にわたって日曜学校の指導にあたっていたことがうかがえる²⁰。プールボー自身が成人前、日曜学校においてガンスの本に馴染んでいた可能性も考えられよう。

Gospel Lessons の構造を見ると、教会暦に従って福音書のテキストが置かれており、それに続いて聖書箇所の内容に基づく質問とその短い答えが列記されるという形を取っている。質問には2種類があり、大きいサイズの活字で印刷されている質問は全般的で容

¹⁹ David Gans, *Gospel Lessons arranged according to the church year : for the use of Sunday-schools, Bible classes and families* (Philadelphia: Reformed Church Publication Board, 1869)。この点を指摘して下さったのは、ランカスター神学校図書館の司書マイカ・ケネディー・スティーブンス教授である。

²⁰ *Ibid.*, iii.

易なもの（その日の聖書箇所を読めば回答可能なもの）、小サイズの活字による質問は聖書に関する幅広い知識を要するものである。これらの質問に回答していくことにより、生徒はテキストの内容とそのメッセージをより深く把握していくのである。

一例として、クリスマスシーズンの冒頭を飾るアドベント（待降節）第1主日の第1レッスンを見てみよう。ここではまず、「この季節の名前は何か。アドベント」、「アドベントの意味は何であるか。ラテン語の *ad* と *venio* からであり、『来る』との意味である」といった問答が登場し、その後にマタイによる福音書 21 章 8 – 11 節に記されているイエスのエルサレム入城の場面が記される。それに引き続いて、この福音書の記述に関して大活字と小活字による種々の質問が来るのである。

例えば、大活字で「人々はこの場面で何をしていたと言われているか？」との質問が挙げられ、その後に小活字で「イエスは弟子たちに何を命じたのか？ 第2節」等の問いが続き、「これは何の預言の成就であるか。ゼカリヤ書 9 章 9 節」、「イエスの到来から何年前にこの預言は語られたのか。457 年前」、「衣を敷くことは何を示すのか。列王記下 9 章 13 節」と尋ねられる。その後再び大活字により「そこには大勢の人が集まっていたのか？」、「他の者は何をしていたのか？」等の質問がなされた後、小活字で「人々が枝を切った木は何であるか。ヨハネによる福音書 12 章 13 節」、「棕櫚の木は何を象徴するのか。黙示録 7 章 9 節」、「ホサナとは何の意味か。救って下さい」、「これは何の預言の成就であるか。詩篇 72 篇 17 節」、「どのような意味でこれは主がメシアであることを示すのか」等の問答が述べられていく²¹。

こうした内容について、プールボーがどのように指導したのかは定かではない。簡単な質問を選んで生徒に答えさせていたのかも知れないが、参考書のように用いていた可能性もあろう。いずれにしても、このような形でガンスの著書を丹念に学んでいけば、生徒は改革派教会の聖書解釈について一通りの理解を得ることができた筈である。現代人の目から見るとガンスの著は教理問答のようであり、そのスタイルもいささか無味乾燥にも見えるが、プールボーにとっては福音書を深く読み込むための頼もしい教材であったと考えられる。

5 結論

以上のように、プールボーの書簡に登場する教科書を実際に読むことにより、彼女の在職時に宮城女学校においてどのような授業が行われていたのか、教師陣がどのように英語や聖書を教授しようと努めていたのか、具体的な手がかりを得ることができた。殊に聖書の授業については、ワイザーのキリスト伝の内容と『一代記』を比較することにより、プールボーらが強調しようとしたメッセージを読み取ることが可能であろう。より詳しく教

²¹ Ibid., 13-14.

育内容を再構築することができるよう、今後の研究が待たれるところである。

謝辞

本研究は、2019年8月24日から28日まで東北学院大学の資料調査チームと共に行ったランカスター神学校内の福音・改革派歴史協会（ERHS、Evangelical & Reformed Historical Society of the United Church of Christ）での調査の成果である。主たる内容は、2019年10月3日に東北学院のラーハウザー記念礼拝堂で開催された「第2回ランカスター神学校調査報告会」においてすでに報告されている。東北学院大学の野村信教授、松谷基和教授、日野哲氏、また我々調査チームを温かく迎えて下さったランカスター神学校のキャロル・リッチ校長、ランダル・ザックマン教授、また神学校図書館の司書マイカ・ケネディー・スティーブンス教授、ERHS 事務局長のアリソン・マリン氏に深く感謝の意を表したい。特に日野氏からは、本文・脚注で記したように三浦ケイ子と須藤鬼一に関して重要な情報を頂いた。明治時代の宮城女学校の生徒・教職員については、宮城学院資料室の佐藤亜紀氏が調査して下さい。また、東北学院チームと共に米国に赴くことが可能となったのは、宮城学院の嶋田順好学院長のはからいによるものである。この場を借りて御礼を申し上げたい。